

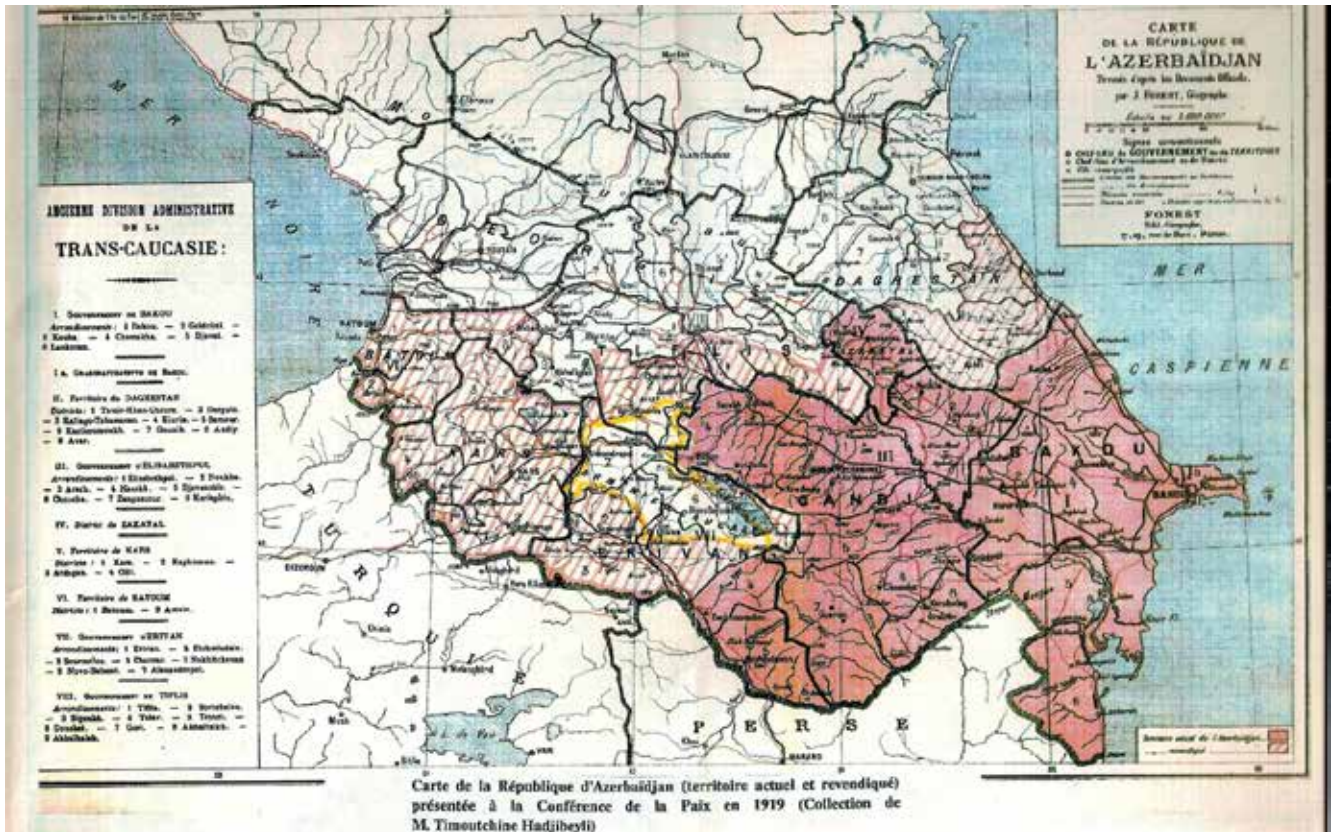
フィルドウシヤ・アフメドゥア  
歴史博士

# アゼルバイジャン民主共和国の 重要な実績

19世紀の初めに、南コーカサスはロシアと併合したら、アゼルバイジャンの土地がふたつに分割された。95年前、北における国民の解放やアイデンティティの開発のための進歩的な勢力の格争のおかげでアゼルバイジャン民主共和国の宣言が完了したのである。それは地域における社会政治的プロセスの論理的な継続になったことである。この時に、国民は共和国のアイディアをしっかりと確立して、国民の将来のための政治的戦争のプログラムの基礎が形成された。1918年5月28日から1920年4月28日まで有利な事態があったので、アゼルバイジャン民主共和国の創設者は国民生活のあらゆる分野で根本的な変革をした。



南コーカサスはロシア帝国の崩壊後、さまざまな一等国の格争の場面になったとき、アゼルバイジャン人はアルメニア人民族主義によって虐殺や民族浄化を行われたとき、十分な経験やバックグラウンドのない状態で国家建設は強い信仰や献身や愛国心や国民への責任感など必要とした。アゼルバイジャン民主共和国は、東洋のイスラム世界、チュルク系民族世界で最初の議院内閣制である。毎年5月28日はアゼルバイジャン民主共



共和国の宣言の日として2年間祝われていた。アゼルバイジャン民主共和国の崩壊後、1920年にこの日はギャンジャで猛攻撃を受けている反徒だけ祝われた。彼らは次のようなスローガンを入れた：5月28日は独立の日だけではなく、母国のために戦い死んだ人間を祀る日として祝われる；5月28日は敵に反抗し、精神の偉大さの現れ、道徳的な勝利の表白する日として祝われる□（5）。つまり、1920年5月28日は、「国家の名誉と尊厳は一般的な受け入れを取り戻し

た日」になった（1、第1章、396頁）。アゼルバイジャン民主共和国はちょっとだけ存在しても、このようなことはたくさんあった：困難な状況で若い国はいつも試験をされていた。それが、アゼルバイジャン民主共和国の創設者は、困難な条件下で当時に一番合っている民主的な政体を選んだ。新共和国の独立宣言という政策文書は、世俗国家、議院内閣制、民主主義の原則の支持を表明し、最後までそれを維持した（2、10頁）。州政府は国会、政府および司法制度

の3つに分かれていた。国会では少なくとも多数の民族があった：チュルク系イスラム教徒□-80席、アルメニア人-21席、ロシア人-10席、ドイツ人-1席、ユダヤ人-1席、グルジア人-1席、ポーランド人-1席、ほかに、バクー労働組合-3席、バクー石油生産組合は2席だった（4、23-26頁）。行政は国会に対して説明責任を果たした。アゼルバイジャン民主共和国は、国会が可決された法律や規制で管理されていた。アゼルバイジャン民主共

和国の形成前に南コーカサスにおけるアゼルバイジャン人の分宿の総面積は約150千平方キロメートルだった。アゼルバイジャン民主共和国の領域は114千平方キロメートルで、人口は330万人だった（1、第1章、11頁）。もともとギャンジャは国の一時的な首都として発表されていた。バクーは、「人民委員のバクー協議会」として知られていたボルシェビキー・ダシュナク政府に打ち取られていたから。

1918年の春にボルシェビキはダシュナク政府と契約を締結して、権力を奪取して、アゼルバイジャンの自治のアイディアを実現していないようにバクーと他のアゼルバイジャンの地区でイスラム教徒の大量虐殺を解き放た。その結果、バクーとその周辺地域は彼らの管理の下においてこられた。アゼルバイジャン民主共和国の政府は9月15日にあった激しい戦闘でオスマン・トルコも入っているコーカサスのイスラム軍のおかげでバクーを解放して、9月17日バクーがアゼルバイジャン民主共和国の首都と

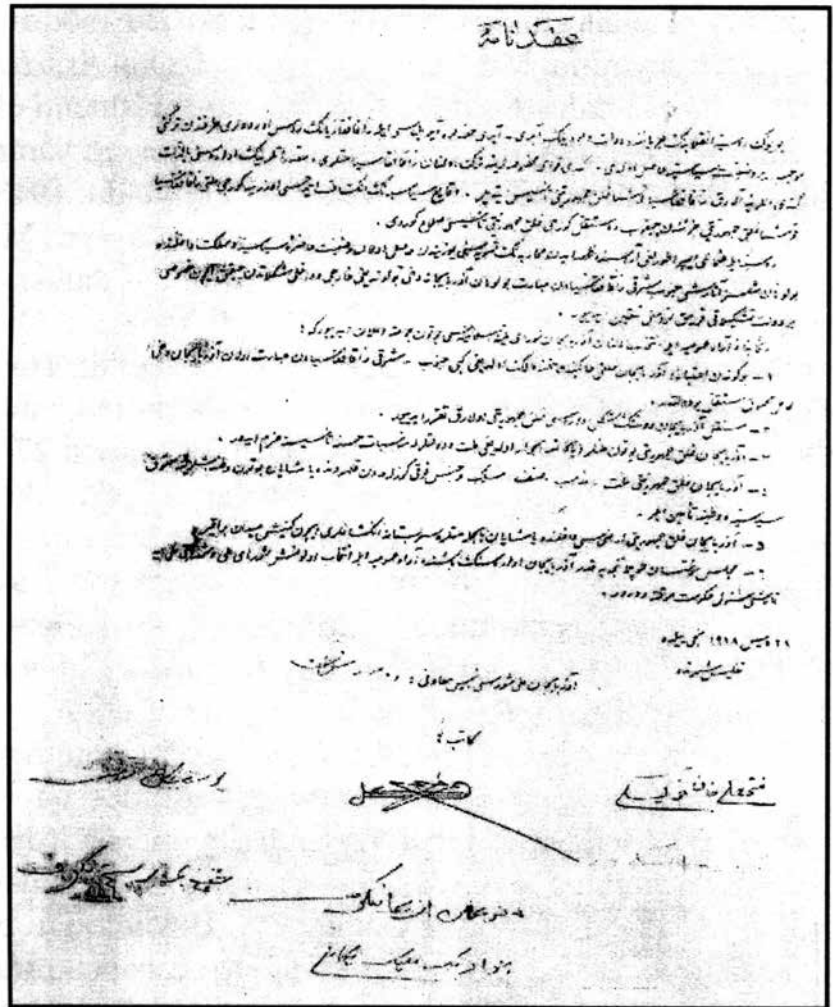
して発表された。アゼルバイジャン共和国が存在していた間5つ政府に置き換えられて、ファタリ・ハン・ホイスキという方は最初の3つの政府を率いて、ナシブ・ベク・ユシフベイリという方は他の2つの政府を率いた。最初に、政府は、アゼルバイジャンの全国協議会の議長を務めていたマメド・エミヌ・ラスルザデという方に対して説明責任であった。それから、政府はアゼルバイジャン民主共和国の国会の議長を務めていたアリ・マルダーン・ベク・トプチュバシェウウという方に対して説明責任であった。国会が正式に1918年12月7日に開いて、17ヶ月だけ行動した。その間、145の会議が開催されて、270以上の法律が議論されて、230の法律が採択された（4；1、第1章、155頁）。国会のメンバーは、11のグループに組み合わされた。それで、アゼルバイジャンは国会制民主主義や倫理などの貴重な経験を得ていた。「国会は、国のすべてのクラスや民族を代表し、国を管理した。それが行われずに指

令やコストなどしない、戦争が始まらない、平和が行われなかった。政府は会議の信頼を獲得したら在任しても、信頼を失ったら、変更した。ポジションは支配の手段ではない。国会は、絶対的なマスターだった」（M. ラスザーデ様）。

アゼルバイジャン民主共和国の初期時代から、国造りにおける複雑な公共の問題が解決され、公共の属性が作られることだった。1918年6月21日に、白い半月と赤背景の八芒星がある国旗が承認されても、11月9日に赤い布は三色の布に置き換えられた（3、188頁、250頁）。新しく形成されたアゼルバイジャン民主共和国の前に立っていた主な目的はバクーの解放とアゼルバイジャンの土地の合同するために国の軍隊を構築することだった。政府は直ちに軍隊を組織し始めて、6月26日はアゼルバイジャンの特別軍隊を作成された（3、196頁）。27日は、公用語はチュルク語、すなわちアゼルバイジャン語が宣言された（3、201頁）。古い学校は国営にされ、新しい学校や教

1918年5月28日にアゼルバイジャンの国民議会における可決された

育コースを開始され、古い地形名を復元するために対策を取られた（ロシア帝国のときウエリザウエトポルと呼ばれアゼルバイジャンの第二の都市の歴史的な名前に戻されたギャンジャと呼ばれ都市である）。軍隊の動員を実施されて、8月11日は兵役に関する決議が採択された。7月15日に、南コーカサスで第一次世界大戦のときテュルク・イスラム教徒に対して大量殺人と強盗を調査して、裁判に加害者をもたらすことは目的である特別調査委員会の設立に関する法令が発行された（3, 213頁）。委員会は、1919年1月までやっていた。その日までは、36巻や3500ページの予備調査資料や95写真など準備され、パリ講和会議にアゼルバイジャン代表団によって提示された。委員会は、128プロジェクト、レポートおよび解決策も用意してから、大量虐殺で194の参加者の刑事訴追の問題を提起した（1, 第1章、379-380頁）。1920年2月9日は、アゼルバイジャンの事実上の独立がパリ講和会議によって



是認されたので、国会が恩赦の法令を可決し、民族的憎悪に関連するすべての刑事事件が終了された（1、第1章、381頁）。それにもかかわらず、アゼルバイジャン民主共和国の特別調査委員会の資料では、旧世紀の初めにあったアゼルバイジャン人に対して大量虐殺の主要な源として非常に重要なことである。重要な変換は、経済分野に行われた。所有異なる

形態のプロパティを開発するために機会の均等の自由主義経済を作成する予想があった。アゼルバイジャン民主共和国の存在の間かなりの成功が達成された：バクー・バトゥミパイプラインが復元されたし、バクー・ジュルファ鉄道建設が継続されたし、アゼルバイジャン国立銀行が設立されたし、自国通貨が発行されたし、カスピ海運会社が開発された（3；1、

第1章、57頁)。国は領土保全と国家防衛に注意を与えていた。1919年1月11日には、新しい軍のシステムに移行された。軍人の準備のため陸軍士官学校、斥候学校、軍鉄道学校および救急医療隊員のための学校が開かれた(1、第1章、49頁)。付け加えると、国の地位を強化するのに役立つ文化的な進化も重要なものだった。アゼルバイジャン民主共和国の新聞の中で特別な位置は、「イグバル」という新聞である。それこそは概念的な形で国の社会的政治的な目標と課題を促進した最初の新聞だった。「イグバル」という新聞と「ディリク」という新聞の主著者は「アチグ・ソズ」という新聞の指導者とスタッフだった。且つまた、彼らはアゼルバイジャンであった国家解放運動を指導していた「ムサウアット」という政党のスタッフである。付け加えると、アゼルバイジャン民主共和国で国民イデオロギーを促進するために「イスティグラル」という新聞、「アゼルバイジャン」という新聞、「オウウラギ・ナヒセ」

という新聞、「ムセルマンリグ」という新聞、「グルテウルシュ」という新聞、「マダニyyət」という新聞、「ゲンチレル・ユルデュ」という新聞、「シェイプル」という新聞および「ザンブル」という新聞が発刊された。国の社会・政治・経済・文化的な生活は、「アゼルバイジャン」という公式新聞で掲載された。最初の4つの冊はギャンジャで出版されても、次号はバクーでアゼリ語とロシア語で発刊された。1918年9月15日の冊でバクーの解放についてレポートや資料が掲載された(1、第1章、70-72頁)。アゼルバイジャン政府がやった最初の変更はザカフカース教師学校のアゼルバイジャン部をティフリスからガザフに転出したことである。ガザフ教師学校は、アゼルバイジャンの小学校のために教員を訓練した最初の教育機関だった。政府は1919年に高等教育機関を開くためにいろいろことがやった。アゼルバイジャン大学、農業研究大学および国立音楽院を開くのが目的だった(1、第1章、74頁)。しか

しこの目的が部分的にしかなかった。勝ち取られなかった。という、「国民の幸福を確保する学習の寺院」というアゼルバイジャンの最初の高等教育機関を開設は94年前である。1919年9月1日、アゼルバイジャン国会はバクー大学の開始について法律を可決した(3、101-103頁)。付け加えると、外国の大学で勉強するのに若者が送信も企画され、1919年-1920年の学年では国費で100若者が高等教育を取るのに海外に行かれる決議が可決された。これは7万ルーブルが割り当てられた。各学生は、400フランの奨学金、1000フランの交通費を割り当てられ、卒業後には、これらの学生はそれぞれ4年間働かなければいけなかった。それで、フランスに留学されは45人、イタリアには23人、英国には10人、トルコには9人だった(1、第1章、75-76頁)。1919年、バクー大学付属でアゼルバイジャンの歴史、文化、文学を研究し、促進するために東洋のイスラム世界の調査学会が開始された。教育

省は1920年代初期に考古学部を設立した。「ヤシル・ゲレム」という文学アソシエーションやイスラム芸術と文化の保護会および「テュルク・オジャギ」があった。1919年12月には、国の文化に良い影響を与えた独立博物館が開設された（1、第1章、77頁）。それが国会の一記念日にデディケートされた。付け加えると、アラビア文字に基づくアゼルバイジャンアルファベットを改革するために委員会も設定された。マスコミの検閲が廃止され、歴史的日付の決定が可決された。

アゼルバイジャン民主共和国の重要な実績は、1919年3月3日の政府の決議により独立した国の独立報道機関であるアゼルバイジャンの報道機関を開始することである（3、285頁）。1920年2月2日にアゼルバイジャンの報道機関の開始について新決議が採択され、3月1日から閣僚理事会付属で自主的な機関としてやって、旧ソ連時代に旧ソ連電信局の一部だった。

1919年8月11日にアゼルバイジャン民主共



和国の市民権の法律が可決されるのはアゼルバイジャンの独立の承認である。法律によって、あらゆる市民は第6条に定めるやり方で宣誓を受け入れるはずだった：「私は（氏名）、アゼルバイジャンの市民の仲間入り、アゼルバイジャンの忠実を神聖で、不可侵に守り、これから他の国を母

国として是認しない、アゼルバイジャンの市民の全職務を行う、アゼルバイジャン共和国の幸福に力、財産、生命も温存しなくて役立つ、万能のAllah (SWT)の前に約束して、誓う。Allah (SWT)はこの約束を果たすのに役立つように」。宣誓をしない人は、「誓う」という言葉を言わないで真剣

な約束を与えた（3、97頁）。

アゼルバイジャン民主共和国は東アジアにおける最初の民主主義の国で、米国および欧米諸国よりずっと前に女性に選挙権を付与した国である。

最初から、アゼルバイジャン民主共和国の外交政策は積極的になっていた。最初の両面の文書は、「オスマン帝国とアゼルバイジャン共和国政府の間に友好条約」である。欧州諸国と外交関係を確立するために、アリ・マルダーン・ベク・トプチュバシエウは1918年8月3日に特命使節および全権大臣としてイスタンブールに送られ（2、53頁）、12月28日にはパリ和平会議に参加した代表団を率いた。米大統領ウッドロー・ウィルソンの発起でアゼルバイジャンのことは初めて1919年5月2日にパリ会議の「4つの会議」の会議で議論された（1、第1章、53頁）。

1919年11月に英国下院の会議でロシア帝国の廃墟の上に作成された国の将来について英国首相ロイド・ジョージのスピーチで明らかに聞かれ

た。英国首相のスピーチは、アゼルバイジャンの認識をサポートしており、支援することはっきりしていた。1920年1月10日には英国の主導でパリ和平会議の最高会議のセッションが招集され、次の日にイギリス外務大臣カーゾンの推薦で会議は次の決議を可決した：「連合国および同盟国は、事実上のアゼルバイジャン政府を認識する」（2、502-503頁）。



アゼルバイジャン共和国国歌、1919年。作曲家 ウゼイル・ハジベヨフ、作詞家 アフマド・ジャヴァド

できたばかりの国の外交関係が国際平和会議で国の認識をしたからもっと拡大された。バクーにはベルギー、スイス、オランダ、チェコスロバキア、フィンランドおよ

び他の国の領事館が開かれた。1920年3月20日にイランは法律上アゼルバイジャンを認識したから（第1章、54頁）、テヘランにアゼルバイジャンの大使館が開かれ、タブリーズに総領事館が開かれ、ラシュト、アンザリおよびマシユハドに副領事館が開かれ、ホイおよびアハラに領事機関が開かれた。アゼルバイジャン国会はイギリス、フランス、イタリア、米国、スイス、ポーランド、ドイツ、ロシアの大使館に関する法律を採択した（2、562-565頁）。アゼルバイジャンでは、イギリス、ギリシャ、ベルギー、グルジア、アルメニア、デンマーク、イタリア、リトアニア、ポーランド、イラン、米国、ウクライナ、フィンランド、スウェーデンおよびスイスの大使館が開かれた（1、第1章、55頁）。1920年4月には国際関係システムにおけるアゼルバイジャンの参加がロシアの軍事介入のせいで中断された。国の転落にもかかわらず、国民アイディアおよび独立国家に対して欲求が残った。アゼルバイジ

ヤンを回復するための行動、世界の政治地図上でアゼルバイジャンの承認、イスラム世界における民主主義の原則に基づいて国を作成すること、「アゼルバイジャン」という名を政治的な内容で充填するのはアゼルバイジャンの有り続けていた基本である。

復元されたアゼルバイジャンは20世紀の終わりに第一共和国の伝統への忠誠を宣言した。5月28日には、共和国の日が正式に宣言され、他の歴史的な出来事の記憶を維持するために取り計らわれた。アゼルバイジャン民主共和国の著名人の名前を回復する期間が始め、彼らの生活や活躍に多数の記事、書籍や番組を傾倒した。付け加えると、第一共和政の精神的な先祖たち、イデオログだった作家および詩人の作品が発表され、再発行された。アゼルバイジャン民主共和国の時代に敷設されたプロの祝日が復元された。つまり、アゼルバイジャンで後継の原則に基づいて、国民的なメモリを復元するために取り計らわれている。公式レベルで開催されている記念祭イベントおよび政治的高評価は歴史的遺産に対して現代のアゼルバイジャン



ンの顧慮であり、開発の将来の方向を決定する上で歴史的ルーツへの執着の顧慮である。✿

#### 参考文献

1. Azərbaycan Xalq Cümhuriyyəti Ensiklopediyası, cild 1. Bakı, 2004, 440 səh. 「アゼルバイジャン国立百科事典」、バクー、2004年、第1章、440頁
2. Азербайджанская Демократическая Республика. Внешняя политика (документы и материалы). Баку, 1998, 632 с. 「アゼルバイジャン民主共和国。外交政策（文書や資料）」、バクー、1998年、632頁
3. Азербайджанская Демократическая Республика (1918-1920). Законодатель-

- ные акты (сборник документов). Баку, 1998, 560 с. 「アゼルバイジャン民主共和国（1918年から1920年まで）。法令（ブルック）」、バクー、1998年、560頁
4. Азербайджанская Демократическая Республика (1918-1920). Парламент (стенографические отчеты). Баку, 1998, 992 с. 「アゼルバイジャン民主共和国（1918年から1920年まで）。国会（速記資料）」、バクー、1998年、992頁
  5. Bayramov Xanlar. Gəncə üsyanı -1920. Bakı, 2010. Байрамову・ハンラル「ギャンジャ・ウスヤヌ1920年」、バクー、2010年